

標準外科学 第12版

北島政樹 監修

加藤治文, 畠山勝義, 北野正剛 編

<書評者> 篠原 尚 (兵庫県立尼崎病院消化器外科部長)

『標準外科学』を手にするのは3度目になる。最初はもちろん学生時代、第4版であったと記憶している。外科学の最初の講義で教授から推薦され、何の迷いもなく購入した。すでに外科医をめざすと決めていた私は、内科の「朝倉」に比べてあまりにハンディな一冊本であることに多少驚きながらも、こげ茶色の重厚な表紙をわくわくしながらめくったものである。ベッドサイド実習の時期になると、真白い白衣に本書片手の学生たちが外科病棟に設えられた部屋で勉強していた。まさに standard textbook であった。2度目は第9版、消化器外科学会の専門医試験対策に入手した。表紙こそ紺色を基調としたイラスト入りの斬新なものになっていたが、本文は第4版の頃と変わらぬ安心感のある2色刷りで、懐かしさもあって購入を即決した。専門医試験を受けようとする外科医が学生用の教科書で勉強するののもうかと思いい、同僚には「講義の準備のために買った」ことにしておいたが、卒業後十数年の間にいささか偏りすぎた知識の穴を埋めてくれる期待通りの内容で、一気に読んだ。今も医局の書架に居座り続けている。

さて、このたび改訂された第12版。一段とハンディになった印象で、さてはこちらもゆとり教育で内容が削られたかと心配したが、頁数はほとんど変わっていない。

白基調のすっきりした表紙と、使われている上質紙のためだろう。頁をめくると、大きめの文字でいかにも読みやすそうな記述が目飛び込んできた。繰り返し読むことの多い教科書にとっては、内容はもちろん、「思わず次の頁をめくりたくなるような読みやすさかどうか」ということも重要である。章のタイトルデザインや余白・図版の配置、フォントの統一感などが旧版より洗練され、成功しているようだ。また、従来の教科書は文章の記述が中心で、ともすれば“退屈”な印象が否めなかったが、本版ではその常識を覆すかのように重要な部分が色文字やアンダーラインで強調され、しかも覚えるべきポイントが箇条書きされた「Note」欄が随所に散りばめられている。例えば食道癌の「Note」では病因や疫学、病期分類、転移経路、診断、治療がわずか15行に凝集されている。これで知識を整理した後、本文に戻り再読すれば、より理解が深まるだろう。さらに余白に書き込んでいけばオリジナルの立派なサブノートが完成する。外科学の勉強はそれで十分だろう。

挿図の良し悪しも、外科の教科書の使い勝手に直結する。本版のイラストは旧版から一新され、立体感のある美しいものに入れ替わった。アイコンに例えるならば、Windows 98と最新バージョンのWindows 7ほどの違いがある。旧

版にはなかったカラー写真も多く収載された。すさまじい勢いで進化する内視鏡手術用鉗子や吻合器に至っては、今現在われわれが使っている最も新しいタイプの写真が掲載されていて驚いた。学生向けだからといって手を抜かず、最先端の外科臨床を知ってほしいという執筆者の強い意図を感じる。

私は日頃、「教育とは、次世代に10年分の得をさせることである」と考えている。自分が外科医として20年かけて獲得した知識や技術を10年で修得させる。すると彼らは、得した10年を次なる進歩にあてることができる。それを伝承していくことが外科学の発展につながる。問題はその手段である。本書第12版を読んだだけでも、私が卒業した22年前と今とでは医学生が学ぶべき知識レベルに雲泥の差があることが明白である。私の知る限り、本書の執筆陣は主要学会で多くの第一線外科医を前に講演されるような各分野のエキスパートばかりであり、本書をひもとけば居ながらにしてそんな先生方の講義を次から次へと受けることができるのだから、一先輩としてはうらやましい限りである。国試合格を目標に、要点だけを羅列した本で暗記中心の勉強もよいが、医学生の皆さんには『標準外科学』紙上での臨床講義に出て、しっかり10年分の得をしてもらいたいと願っている。

●B5 頁784 2010年
定価8,925円
(本体8,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-00865-5]
医学書院 刊